

美術専攻 日本画研究領域

ヒシヌマ ユナ

# 菱沼 結菜



創構型宙望機—サフム(SAFm)—

紙本着彩

## 創構型宙望機—サフム(SAFm)—

本作品は機械という存在に対する問い、すなわち人間によって生み出された機械が洗練された無駄のない形態と静かな動作の背後に、もし感情を宿していたとしたら何を思考するのか、という想像を出発点とした。現代において、感情を持つ機械は存在せず、その内面を知る手段もない。身近になった人工知能でさえ、感情的な振る舞いに見える現象はプログラムによって生成されたものであり、人間が持つ感情とは異なる。本作品はそのような現状を背景に「感情を持つ機械 (Sentient Machine)」との出会いを想定して描いたものである。

遠い未来、人工知能を搭載したことで人間のように脳と身体を持つ状態となった機械が、自己更新を繰り返す過程で自我を獲得する可能性が考えられる。自我を得た機械は欲求を持ち、生物に近い存在へと変化していくことが想定される。そして彼らは自らの望みを叶えるため、身体形態を自在に変化させ、部品の生成や再構築を行う存在となるだろう。この自己創造的な身体構築の過程を、本作品では「自己創造的構築 (Self-Fabricating)」と位置づけた。

こうした機械は、生物のような内面を持つことで、野生動物の警戒心や恐怖心、人間の欲望や好嫌といった感情を示す可能性がある。また、自身の意思に基づいて行動し、望む姿を追求し、生まれたことを喜びとして享受するかもしれない。

本作品で描いたのは、その中でも特に宇宙へ行くことを希求する種族である (Space-Aspiring Machine)。彼らは飛行のための燃料も自ら製造し、形態に依存せず飛翔できるよう進化した。人間が未だ到達していない飛翔する船の形態を選択し、鳥類の美しさへの敬意を込めてその要素を取り入れている。彼らは宇宙へ行くことを望む機械群として仲間を連れて飛び立って行き、好きな場所へ自由に冒険することができる存在となった。

本作品では自我と自己構築能力を持つ機械群を「創構型」と分類し、その中でも宇宙への憧れを主要な志向とする機械群を「創構型宙望機 (Space-Aspiring Machine of the Self-Fabricating Type)」と定義する。彼らには親しみを込めて「サフム (SAFm)」という名称を付与したい。